

# 聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

## 第6章 預言者における祈り②



エレミヤ

「涙の預言者」であるエレミヤもまた、祈る預言者でした。既に見てきたように、涙と祈りは、涙が謙遜を示すものであるならば、共に非常にふさわしい形で働くものです。「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません」（詩篇 51:17）とある通りです。神からのお答えをいただくことは、願いが謙遜と砕かれた心によってなされるときに、さらに確かなものとなるのです。



エレミヤの祈りで最初に記録されているのは、神からの召命に対する応答です(エレミヤ 1:1-8 を参照)。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません」(1:6)。一見、これは言い訳に思えるかもしれませんが、そこにあるのは謙遜さであり、これこそがこの若い預言者にとって、最高の推薦状となっているのです。 アダム・クラークがこう観察している通りです。

聖務のために “神からの召命” を本当に受けている人々は、自分自身を深く知らしめられてきた人々であり、自らの無知を感じており、自らの弱さを知っている人々である。彼らはまた、その務めに付随する恐るべき責任も知っている。そのような人々をしてその務めに着手させることができるのは、神の権威の他に何も無いのである。

エレミヤをお召しになった神のご計画は明白でした。神はエレミヤの誕生以前から、彼のことを知っておられ、聖別し、任命しておられました(1:5 を参照)。「わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに

命じるすべての事を語れ」(1:7)。そこでエレミヤは、信仰を失っていた人々に神のメッセージを語りました。「背信の子らよ。帰れ。わたしがあなたがたの背信をいやそう」(3:22)。そして、神が聞きたかった応答は、次のようなものでした。「今、私たちはあなたのもとにまいります。あなたこそ、私たちの神、主だからです。確かに、もろもろの丘も、山の騒ぎも、偽りでした。確かに、私たちの神、主に、イスラエルの救いがあります」(エレミヤ 3:22-23)。

人々の愚かさとその背信の根底にあったものは一つでした。彼らは偽りの神々に信頼していたのです。エレミヤのメッセージは、あなたがたは自分の仕えたい神々を選ぶことなどできないというものでした。23節(「もろもろの丘も、山の騒ぎも、偽りでした」)を見ると、彼らが偶像を礼拝していたことが伺えます。人々を罪と困難な状況から救うことができるのは、唯一にしてまことの神、主だけなのです。

エレミヤの歩みが神に対立するものとなったことを示す箇所は皆無ですが、彼は、敵が滅ぼそうと近づいてきているというメッセージ(エレミヤ 4:5-9)をイスラエルに伝えるよう言われたときには、神を責めるような応答をしています。「ああ、神、主よ。まことに、あなたはこの民とエルサレムを全く欺かれました---『あなたがたには平和が来る』と仰せられて。それなのに、剣が私ののどに触れています」(エレミヤ 4:10)。

祈りや礼拝ならばどのようなものでも神をたたえるものになるというわけではなく、また、あらゆる祈りや礼拝が望み通りの結末を得られるわけでもありません。誠実で神をたたえる日々の歩みが無いならば、祈りは嘲(あざけり)となってしまいますの(詩 66:18、イザヤ 1:11-16 を参照)。有能な注解者や研究者たちの中には、エレミヤのこの奇異な祈りに使われている言葉を調整することで、彼を免罪しようとする人々があります。しかし、この祈りの真理に最も近く迫るためには、非常に敬虔な部類の人々であっても、極端な重圧の下にあったり、神の計算された行動に忍耐できなかつたりするときには、過剰な反応を示してしまうことがあるのだということ(ヨシュア 7:7 を参照)を認識しなければなりません。そのうえで、エレミヤのこの祈りは、あくまでも文字通りに解釈すべきなのです。エレミヤのこの例から、私たちは、人間として欠陥のある自分自身の性質についての教訓を得ることができます。私たちは、全能の神に対して長々と批判の言葉を連ねても、決して正当化されることはありません。主ご自身が「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ」(イザヤ 55:8)とおっしゃっている通りです。自分は神よりも事がよくわかっていると思込んでいるような不純な心からの祈りは、罪であり、悔い改めなければならないのです。

同時に私たちは、この心砕かれた失意の中にある預言者に対して、断罪的な接し方をすべきではありません。エレミヤは、人々の代表として預言の成就を深く願うがゆえに、その成就が目に見えて遅れていたことで、苦々しい叫びを発しているのです。

エレミヤの祈りの例の中には、神の民の苦難に対する涙が描かれているものもあり、また、別のところでは、その祈りの調子は痛みと苦悩を表現したものとなっています。

主よ。あなたの目は、真実に向けられていないのでしょうか。あなたが彼らを打たれたのに、彼らは痛みもみませんでした。彼らを絶ち滅ぼそうとされたのに、彼らは懲らしめを受けようともみませんでした。彼らは顔を岩よりも堅くし、悔い改めようともみませんでした。(エレミヤ書 5:3)

エレミヤはここで、涙の理由を言葉にしてくれています。彼の心は、イスラエルからの応答が無いこと、イス

ラエルが、神の側からの贖いに向けた措置に身を委ねられていないことに押しつぶされていました。エレミヤにはわかっていたからです。神は、心優しい憐れみと大いなる忍耐に満ちておられますが、ある一線を越えると、その裁きはもはや保留されないのです。神は、その目が「真理をお求めになる」(創 6:5-7、18:20-33、I ペテロ 4:17 を参照)神でもあるのです。

しかしながら、時は来るのかもしれませんが。神が差しのべてくださる愛に対して、人々がついには応答を拒む時です。その時には、とりなしの祈りは止まなければならず、裁きが始まらなければなりません。神がエレミヤに助言をしたのはこのためです。「あなたは、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫んだり、祈りをささげたりしてはならない。わたしにとりなしをしてはならない。わたしはあなたの願いを聞かないからだ」(エレミヤ 7:16)

人々のための痛みと苦痛に加えて、エレミヤは圧倒されるような悲しみの感情を体験していました。それは、神の民が受けた罰は彼らに相応のものであることを知っていたからでした。

主よ。私は知っています。人間の道は、その人によるのではなく、歩くことも、その歩みを確かにすることも、人によるのではないことを。主よ。御怒りによらず、ただ公義によって、私を懲らしてください。そうでないと、私は無に帰してしまうでしょう。(エレミヤ書 10:23-24)

なんという美しさと香りとが地のちりから流れ出ていることでしょうか。林や花、風に飛ばされる種の色も香りも、植物が育つ冷たい地がなければ知られることはないでしょう。おぞましい人生の体験も同じです。悔いた心が告白と服従の言葉を語るとき、最悪の状況の中から美と香水をもたらすことができるのです。

この祈りは、私たちに直接関係のある考え方を、いくつか教えてくれています。①私たちがより頼んでいることと導きを必要としていることを認識しつつ神に近づいていくことは良いことです。②罪は神の怒りに価するものですが、神の矯正(教え、訓練、指示)に喜んで服従するなら、私たちは、優しさ、公正さ、穏健さを含んだ形での正義を期待することができます。アブラハムが「全世界をさばくお方は、公義を行うべきではありませんか」(創 18:25)と語った通りです。③(反抗や悔い改めの欠如のゆえに)神の怒りが下る人々は、「無に帰して」しまいます。すなわち、取るに足りない者になってしまうのです(エレミヤは、預言者がよくそうするように、ここでは、自分を人々と一体化させています。キリストの時代以前に翻訳されたギリシア語の七十人訳では、24節における「私を」の部分で「私たちを」としています)。



悲嘆にくれる預言者エレミヤ (レンブラント)



## 質問

- 1 神からの召命に応答するエレミヤの祈りには、どんな態度が含まれていますか？ 最終的にエレミヤはどのように応答しましたか？ あなたにも、自分の無知や弱さを知りながら、神の召命に応答すべき奉仕や務めがあると思いますか？
- 2 神を責めるようなエレミヤの祈りの理由として考えられることは何ですか？  
あなたも神を責めたり神に文句を言ったりする祈りをしたことがありますか？その後、どうなりましたか？
- 3 エレミヤの祈りから、とりなし手はどのような心や理解を持っている必要がありますか？  
あなたは、誰のために、何のためにとりなすように導かれていると思いますか？
- 4 エレミヤの祈りから私たちに直接関係のある考え方として学ぶことが3つあります。それは何ですか？  
その中で、あなたにとって最も必要だと思うことはなんですか？
- 5 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？  
どんなことを実践したいと思いますか？



祈り

天の父なる神さま。あなたは私の力のなさを知りながら、働きに召して下さいます。  
あなたの召しに忠実にお答えできますように。必要とあれば、エレミヤのように涙を伴うほどのとりなし手でありますように。いつもあなたに従順な者でありますように。